

上映映画解説

1955, 10 ~ 11

国立近代美術館 フィルムライブラリー



No. 40

Tartuffe

「タルチュフ」鑑賞会について

フィルム・ライブラリーでは、内外古今の優秀映画の収集保存とその活用に努めておりその事業の一部として、歴史的な価値のある芸術性豊かな古典映画を鑑賞し研究する会を開いていますが、今回は特別鑑賞会第一八回として、ドイツのサイレント映画「タルチュフ」をとりあげ、一月二〇日まで毎週二回（日・水曜日の二時）上映します。

「タルチュフ」は、いうまでもなくモリエールの有名な戯曲に基き、カール・マイヤーが劇中劇の形式に脚色したもので、ムルナウが監督し、ヤニングスとクラウスの両名優が競演して、ドイツ・ウーフア黄金時代のサイレント映画の高い水準を示しています。日本では、昭和二（一九二七）年一〇月一〇日に、浅草帝国館と新宿武蔵野館で封切されました。

タルチュフ

無声七巻

ドイツ・ウーフア社一九二六年作品

—— スタッフ ——

原作

—— スタッフ ——

監督

モリエール

脚色

カール・マイヤー

撮影

カール・フロイント

—— キャスト ——

主オルゴン……………ウエルナア・クラウス
 妻エルミル……………リル・ダゴフェル
 召使女……………ルチ・ヘフリッヒ
 怪僧タルチュフ……………エミール・ヤニングス
 老紳士……………ヘルマン・ビッヒャ
 彼の家政婦……………ローザ・ヴァレット
 彼の甥……………アンドレ・マッターニ

Tartuffe

The Old Gentleman……………Hermann Picha
 His Housekeeper……………Kosa Valetti
 His Nephew……………Andre Mattoni

Orgon……………Werner Kraus
 Elmire……………Lil Dagover
 Dorine……………Lucie Hoetlich
 Tartuffe……………Emil Jannings

Based on Molière's famous play,

Scenario by Carl Mayer,

Directed by F. W. Murnau,

Photographed by Carl Freund.

この映画が封切当時、どのように受けとられたか、その反響の一例として、岩崎昶氏の批評を、キネマ旬報第二八一（一九二七年二月一日）号から紹介しましょう。

——それが非常に卓抜な作品であって、映画の女人達批評家や製作技術者に絶大な賞讃をうけてゐながら、しかも一般の観客に左したる感銘をも残さないといふ映画がある。「タルチュフ」はその種の代表的なものである。

この映画が技術的に殆んど完成の域に達してゐることは、マイヤー、ムルナウ、三人の主役、それに撮影のカール・フロイントとこれだけの名前が証明する。それは、凝った、深い配光、カメラ・アングル、監督手法等、を以て独逸映画のオーソドックス（その中には多分の劇場的なるものを包含してゐる）の最高水準を示してゐる。

併し、私は、一年前に「最後の人」を作ったそのメンバーがその急進主義を捨て、再び正統派に依つた反動的な動きを不満に思ふ。そしてこの点に「タルチュフ」が究局に於て我々を揺り動かすことの出来ない真の原因があると思ふ。それと、もう一つはモリエールを現代に生かさうと企てたマイヤーの違算である——又当時の内務省検閲が、この映画に對しどのように行われたか、昭和二年の「フィルム検閲時報」（内務省警保局）に次の記述が見られます。

一、切除 一三米

第七巻第三、四両字幕間ニ於テ「タルチュフ」ガ「エルミル」ノ寢床ノ上ニ仰臥スル場面切除一三米（風俗）

（引用文の仮名使いはすべて原文のまま）

名優競演

村山知義

一九二〇年代の中頃から終りにかけて、といへば、ドイツ映画の一つのピークであった。あのように目ざましい芸術的發展の時期は、その前のドイツ映画にもなかったし、またその後にも、まだめぐって来ない。その時期に、ドイツの映画は、ドイツ独自の機械的技術的な達成を裏付けにして、いかにもドイツらしい、重厚な、映画芸術を發展させて、忽ち世界市場に乗り出したのであった。

「カリガリ博士」朝から夜中まで「シルヴェスター」「心の不思議」「美と力への道」「ファウスト」「宇宙の驚異」「ヴァリエテ」「ジューグフリード」「ルンパチ・ヴァガブンドス」「オセロ」——

思い出すままに並べて見ても、あのころのドイツ映画の發展は、すばらしかった。それらの映画のどれにも、ウエルナー・クラウス、エミール・ヤニングス、コンラッド・ファイト、オイゲン・クレッパ、イレネ・ヘフリッヒ、リル・ダゴファアというような当時のドイツの舞台を背負って立っている代表的舞台俳優が主演していた。演出、装置、照明等も、芸術的に高いものをつくるための努力を重ね、新しい技術的発見も試みられていた。

中でも、この「タルチュフ」はたった七人の俳優を使い、その俳優たちに、十二分に演技させている、という点で、当時のドイツ映画の一つの特徴を非常にハッキリと示しているものである。

いうまでもなく「タルチュフ」は、フランスのモリエールの喜劇である。脚色者カール・マイヤー（「最後の人」「カリガリ博士」の原作者）はこの古典喜劇を出来るだけ、現代に結びつけようと工夫した。即ち、今にも死にそうな、財産のある老人がいる。彼をいかにも親切そうに世話している家政婦の老婆は、実は老人の財産が目当てなのであり、財産を彼女にゆずるといふ遺書を老人に書かせておいて、少しずつ毒薬を吞

ませて殺してしまおうとしている。そこへ、俳優になつてゐる若い甥が老人の所へ帰ってくるが、老婆は、うっかり老人の財産がそっちへ行つては大変と、家へ入れない。甥はそこで、突然、画面から観客に訴へかける。

「諸君、私はまだ負けはしません。私の次の手段をごらん下さい。」

彼は早速見世物師に変装し、「タルチュッフ」という映画を持って来て老人と老婆に見せることになる。そこからモリエールの「タルチュッフ」になるわけだが、ただヴァレールとマリアンヌという若者たちのくだりをカットしてしまい、ドリリヌという小間使いも中婆さんに仕立て、専ら話をオルゴン、エルミール夫婦とその家庭には入り込んだ偽善者タルチュッフにしぼっている。そしてその映画が終ると、なおもごまかそうとする家政婦に、証拠の毒薬のびんをつきつけるので、老人も目が覚め、ついに彼女を追ひ出してしまふ。甥はまた観客に向つていう。

「偽善者は、いつ、どこに居るかわからない。それは、いつの間にか、あなたの隣に坐つて居るかも知れない。」

そういう映画である。

一九二六年の作品だから、今から二十九年前のものだ。従つて、むしろサイレント映画で、字幕がはいつてゐる。字幕はほとんどのものはドイツ語だろうが、これは英語のになつてゐる。日本では一九二七年暮に封切られた。たぶん徳川夢声さんが説明したのではないかと思う。こういう「芸術映画」はもっぱら夢声さんの縄張りだったからだ。

移動撮影というものはまだ善明されていなかった。パン（カメラを左右又は上下に廻転させる）という技術が、やっと試みられ出した時で、この映画でも、僅か三箇所ほど、ごく控え目に使われている。だから今の映画とくらべると、短いカットが非常に数多くつながれてゐることになり、セカセカした感じを与えられるのは止むを得ない。

また、サイレントだから、今の映画ならセリフです

かところを、全部、身体の動きや、顔の表情で表現しなければならぬ。その結果、今の観客が見ると、演技過剰の感じを抱かせられる。しかし、それだからこそ、当時の俳優は、高い演技力を要求された。この映画を見ても、そのことはよくわかる。二十九年前の、当時のこのドイツの舞台俳優たちは、決してただ、舞台の演技を映画に持ち込んだのではない。そして、そのために、過剰な演技をしてゐるのではない。彼等は長い舞台生活で叩き上げられた演技の基礎を、こんなにたくさんクロイズ・アッパやバストの出る映画に適するように、苦心して、発展させたのだ。まことにこれは映画の演技の基礎ともいうべきものだ。心の動き、感情、感覚が、一々、こまかく、適確に表現されている。「ナチュラール」ということを何よりも尊重ように教えられている今の若い俳優諸君が、この映画を見て、ただ、オーヴァーな、臭い演技として見すごしてしまふようだと、大変な間違いである。このしつかりした能力の上に、「自然さ」が生み出されなければならぬのだ。

しかも「タルチュッフ」は古典喜劇である。古典喜劇にふさわしい、誇張された演技のスタイルも、この映画では、考えられてゐるのである。

またこの映画のセットと照明にも注目しなければならない。全篇を通じて、ほとんど室内ばかりで、しかもそれは薄暗いか、または夜が多いのだが、あの芸術的に氣をくばられた建築美、どっしりした量感、よく行きとどいた、こまかい配光というものは、映画初まつて以来のことであつた。カメラの技術もまた当時としては最高のものであり、革命的ですらあつた。（カメラマンはフロイント）ロケットに落ちる涙のクロイズ・アッパ、椅子で泣いてゐる老婆を、傍に立っている老人の目で見える俯瞰撮影、カーテンの隙間から見てゐるオルゴンの顔が、コーヒーの器にうつるアッパ——といった具合に、初めての、しかも適確な手法が試みられてゐる。

こういうフィルムは、是非大切に保存して、時々、見せてほしいものだ。